

# 大学講義と放送利用公開講座を合体する試み

—金沢大学教養部「言語文化」における実践について—

細川 英雄

## Linking the Class with the Radio Program

—A Report of “Language and Culture” in Kanazawa University—

Hideo Hosokawa

### Abstract

This paper reports on the link between the “Language and Culture” class in Kanazawa University and the radio program at the open college for adult education. Why we did link the class with this radio program? What possibility can this link have in the education of the university? What kind of attitude should we find in the class with the radio program? This paper tries to answer these questions. Based on these considerations, it proposes a perspective for the improvement of the teaching methodology at the university, and internalized means of communication in the class.

### キーワード

大学教育方法 言語文化 公開講座 ラジオ番組 コミュニケーション

### はじめに——なぜ合体か——

大学における教育方法の改善については、近年様々な議論が行われているが、ここで報告するのは、そうした大学授業の方法改善としての放送利用による公開講座との合体の事例である。

一般に大学の講義と公開講座は教育対象も違い、それにともなって学習者の学習目的も異なるため、一方で大学教育の開放や生涯教育における大学の協力が唱えられながら、通常の大学の講義と公開講座とは一線を画して行われている。

しかし、これをもう少し大きな眼で考えた場合、いかに学習者の意欲を刺激し、自ら考える形へと導入するためのプロセスとしては、ある一段階での両者の合体は双方の刺激として有効なのではないかと思われる。本稿では、こうした意図にもとづき、放送利用公開講座を大学教養部総合科目と同時併行で実施し、放送を大学授業の一環として利用した成

果を報告するものである。こうした放送利用の方法や考え方については、その分野・領域により考え方も異なり、一概にその是非を論ずることはむずかしいと思われるが、一つの試みとして大方の御叱正・御批評をいただければ幸いである。

## 1 総合科目「言語文化」の意図と方法

金沢大学教養部に、総合科目「言語文化」に設置したのは、1988年前期から3年間である。この科目設置の趣旨と目的は、次の通りである。

### 「言語文化」(講義及びゼミナール)昭和63年度臨時開講趣旨

言語と人間の関係は全ての研究領域に関わる問題であるが、この関係自体はそれぞれの社会によってそのあり方が異なっている。こうした社会における人間の有り様を文化とするならば、この言語と文化の関係を考えることは私たち人間にとってきわめて重要な課題であることが分かる。

大学教育において異言語を知る機会は主に外国語学習として具体化されるが、この学習は当該言語そのものの習得を第一義とするため、必ずしも異文化理解という形で導入されるわけではない。言語と文化の関係は、むしろ日常的に使用している母語を軸に、異言語文化間の第一言語と第二言語の問題や、同一言語文化間の古代語と現代語あるいは方言と共通語の問題等を比較言語対照の立場から検討することによって明らかになってくる。このことによって、自らの言語文化を再認識するとともに、母語を含めた様々な言語とその文化を相対的に捉える眼を養うことになる。

こうした観点からその文化を考える視点は、あらゆる科学の基礎として位置づけることができようし、そうした視点の養成こそ大学の一般教養教育において特に必要であると考えられる。本教養部には従来この領域に該当する科目がないため、来年度における総合科目「言語文化」の臨時開講を計画した。

ことばとその教育、すなわち言語教育の最終的な目的は、言語による的確な理解と表現の育成であると私は考えている。つまり、ことばによる十全なコミュニケーション能力の達成ということが言語教育の最大の課題であろう。

もちろんこれは、大学教育だけが負うべきものではなく、むしろ小・中・高校のそれぞれの段階で行われるべきものである。しかし、高校・大学の入学試験の実際からみると、この目的が各段階で達成されているとは言いがたい。むしろ、入学試験のための技術的な知識情報注入が弊害となって、母語による十全な論理展開能力が失われていると言ってもいい。それは、熾烈な入学試験を通過してきたはずの大学生の日常言語能力がきわめてお粗末であるという事実からも指摘できる。

こうした状況の中で、大学教養課程の授業はどうあるべきかということを検討する過程で考えついたのが、この「言語文化」の設置である。

それはまず、専門課程のための準備のための知識の注入であってはならない。大学受験によって分断された、ことばに対する興味や関心を引き出し、自らの言語生活におけるこ

とばの重要性を認識し、具体的な言語活動としての理解や表現に繋げていくことではないか、と考えたのである。

この点で、当該「言語文化」では、次のような方針を立てた。

- ①なるべく一方的な講義形式をとらないようにする。
- ②ことばに関するアンケートを随時実施し、そのデータをもとにした解説を導入する。
- ③なるべく参加者との討論を取り入れ、参加者間のコミュニケーションを図る。
- ④担当者の考えをすぐに出さず、受講者自らが自分の考えを自分のことばでまとめられるように配慮する。

以上のような方針により、ことばに関する情報を知識として与えるのではなく、具体的なテーマをめぐって、参加者で討論をしたり、感想を出し合うというような方式をとりつつ、受講者が自らの言語生活について自らの問題として考える姿勢を身につけるといふところに授業の目的を置いた<sup>(註1)</sup>。

この授業の所期の目的は、後に1990年度後期受講者の感想として次のように述べられていることと符号する（引用の誤字・脱字等は原文のまま。以下、同じ）。

- 今回のような授業のスタイル・方法については、まず“大学の授業だな”と妙に嬉しかった。高校の時の授業といえば、やはり先生が一方的に話し、それを生徒が必死でつめこむ受験のための授業であった。だから、この授業の様に教養をつける為の授業というのは何ともリッチな（頭脳・心にとって）気がした。〈略〉討論形式というのも、自分の考えを他人に話すことによって再度改めて自分の考えを認識できる、素晴らしい形式の講義方法であると思う。否、討論だけでなく、資料やテキストを読み、考えを認識することは非常に魅力的なことであると思う。（法学部1年、N・T）
- 先生は、講義中、すぐには、結論を出さず、また答えにくい問いを出して、私達に積極的に考える姿勢を求められました。時には、それをまだるっこしく思うこともありましたが、最終的には、それが私に今まで見失っていた言葉の世界への扉を開いてくれました。（文学部1年、Y・N）
- …授業で渡されたプリントで、4つの中から自分の考えに近いものを選ぶというのがあったが、それを書いたときに自分で意識することができるように思う。まさに「面白い」と感じた。（“面白い”とは“目の前がぱっと開けた時”のように何かを理解できたときの気持ちを表す言葉だと高校の時に知ったが、それを体で感じる事ができた。）〈略〉私がこの講義で知識として得たことはたくさんあるが、自分自身の中で成長できたと思えるものは、ことばに対する意識の持ち方である。私自身話す時に「この表現で、本当に私の気持ちを言い当てているだろうか」と考えるようになり、まだこの程度でしかないけれど、私にとっては大きな変化である。（文学部1年、K・T）
- 授業のスタイル・方法についてですが、大学の講義らしくていいと思います。学外の方もいて、他の講義とはちょっと違った感じがしました。また、レポートで自分の意見をまとめるのはたいへんでしたが、それだけにやりがいもありました。意

見発表の場もありましたし、充実した講義だったと思います。そして、知識を身につけることを目的とせず、自分で考えることを重視して進められたことが楽しく受講できた理由だと思います。(教育学部1年、Y・T)

○ 大学の授業によくありがちな、受け身の授業でなく、討論したり、レポートを書いたり、先生の言うことをただノートに書くといった授業でなかったので、「自分で考える」といったことが多く、その点がとてもよかったです。自分で考えたからこそ、日本語というものに対して初めて意識したのだろうし、先生の言いたいことはあまり理解していないかも知れませんが、「自分で考える」という事ができただけで大きな収穫になりました。(法学部1年、T・F)

○ 今回のような授業のスタイル・方法については、結論からいえば、おせじぬきに、ひじょうに良いと思います。大学とは、そして教養部の授業とは、かくあるべきだと自分は思います。私立大学と比べると、私立大学では極めて講座の選択及び講座の種類について多様性をもたせてあるようです。金沢大学が国立だからどうしてもカタくなるのはしょうがないなと思いつつ、でも、どうしても腹立たしさをぬぐいきれませんでした。そんな中、この言語文化は、すべてにおいて理想的ではないでしょうか。一般市民にも開放しているなんて、なかなか素敵なことだと思います。それからテストについても理想的だと思います。何故なら学生にプレッシャーをあまりかけないからです。こんなこと書くと、先生は「フンッ」とちょっと不気嫌になるかもしれませんが、大学は学生をしばりつけるような講義を展開してはいけないと思います。いいかげん子供ではないのですから、自分のやりたい勉強（勉強でなくても打ち込むべきこと）というのがあるはずであって、そのような学生の自主性を押しつけるようなことになってはいけないと思います。「試験をしないと生徒が勉強しないからテストをする」式の考えはすててほしいと僕は思っていました。(なまいき言ってごめんなさい!!) このような観点からも、この授業は、すばらしいと思いました。(法学部1年、R・T)

○ 授業スタイル・方法については、みんなで討論し合って自分と違った考え方を聞くのが楽しい。またその考え方についてどうしてそのような考えかということ自分で考えるようになり、今まで自分の考えしか正しくないと思っていた私の頭をやわらかく出来るようにな授業である。(教育学部1年、M・T)

○ このような題材である限り、この授業のスタイルが一番ふさわしいと私は思う。特に、「自分なりの解釈・考え」が固まってしまっていることばというものについて考えるときに、アンケートなどで、他の人の考えをきくことは、自分の考えを改めてみなおしてみることに大きく役立った。アンケートの集計結果では、「自分はこう思うが、このアンケート結果からみると、一般にはこう考えられているのだ」という大きな見方ができた。討論形式では、問題を深く掘り下げていくことや、同じく他の考えをきくということに関して役立ったが、もっと活発な議論であれば(自分も含め)更によかったと思う。ただ、もしも、今日ここにいる全員が授業にでてきたなら、討論形式は成り立たないようにおもったのは私だけでしょうか…(教育学

部1年、M・O)

しかし、この目的・方法は、考えてみれば、教養部在籍の学生にだけ必要なことではなく、言語生活を行うすべての人にとって必要な訓練であるということに気づいたのは、一般社会人向けの大学公開講座を担当するようになってからである。そのため、90年度後期には、非公式にはあるが、学生以外の一般学外者の参加を認めた。その内訳等については後述する。

## 2 大学公開講座の目的と限界

### 2-1 質疑応答形式とゼミナール方式

1988年度後期に金沢大学教育開放センターより学内公開講座企画の依頼を受けた折に考えたことは、こうした「言語文化」の方法がどれだけ生かせるか、ということであった。

学外の一般の方々を対象にした公開講座で、いきなりこうした感想や討論を軸にした講座運営を行っていくのは至難の技である。そこで、いくつかのトピックを選んで話題を提供し、それをめぐって質疑応答を行うという形式をとることにした。この講座の全体の構成は次の通りである<sup>(註2)</sup>。

1988年度後期金沢大学公開講座「私の日本語再発見」のテーマと講師

- 第1回 母語を発見する喜び(細川英雄・金沢大学)
- 第2回 外国語を通して日本語について考えたこと(正宗美根子・北陸大学/司会・細川)
- 第3回 コンピュータで「サラダ記念日」を分析する(酒井恵美子・金沢大学/司会・細川)
- 第4回 地域語の豊かさを知る(中田敏夫・金沢大学/司会・細川)
- 第5回 外国人に日本語を教える(佐々木倫子・静岡大学)
- シンポジウム「日本語教育と日本語」佐々木・正宗・中田・酒井(司会)細川
- 第6回 外国語としての日本語・母語としての日本語(細川英雄・金沢大学)

このときの公開講座全体を通しての講座内容と方法に関する一番大きな問題は、やはり質疑応答のレベルがバラバラで、どうも議論が噛み合わないということであった。かなり気をつけて進行役を務めたが、どうしても質問者の姿勢が「先生の意見をうかがう」というところから脱しきれず、それぞれのテーマを自分の問題として捉えられないことであった。これを参加者の側からみると、各人がお互いの反応がつかみにくいために、参加者自身、発言しにくいということにもつながっていると思われた。この問題を解消するには、少なくとも、より少ない人数であることが条件となる。そうすれば、テーマ・問題を絞って行うことができ、もう少し違う発展があるのではないかと考えた。

そこで、引き続き委嘱を受けた1989年度前期では、ゼミナール方式を取り入れ、「日本語を科学する」というテーマで、前年度の受講者の中からさらに意欲のある人を拾い上げるという方法を採用した。

ところが、ここでは、さらに別の問題に遭遇した。それは、参加者の質が異なるという点が大人数のときよりもさらに増幅して現れたことである。つまり、感想を述べる程度で

あるならば、それほど必要とされない、ことばに対する自らの問題意識の差が、課題を与えられ、それをこなして人前で発表するとなると、かなり明確に顕在化するからである。

すなわち、ことばに関して固定観念を持ち、その観念を変えることができずに知識だけを身につけようとする受身のタイプの受講者には、具体的な議論に入ることさえもむずかしいのである。これは従来の学校教育があまりに一方向的に行われてきたことを示すものであろうが、公開講座の受講者には年輩の方も多いためか、こうした知識情報受動型の学習が大学の授業であると思込んでいる層がかなりあるようだ。

このゼミナールを通して私は次のように再認識した。大学教育とは、学習者のこうした知識偏重の発想を打ち破り、いかに自分で問題を見つけ、考えることの重要性に気づかせるかということではないか。

## 2-2 放送利用による公開講座について

### 2-2-1 企画と実施方針

こうした反省のさなかに、1990年度後期の放送利用公開講座（ラジオ）の企画依頼を受けた。不特定多数の受講者を対象とする放送の場合、コミュニケーションの一体化を実際に確かめながら行うという前述の「言語文化」の方法は、それ自体無理である。したがって、ラジオによる公開講座の場合は、放送を通して受講者と一体感を共有でき、その一体感によって受講者の受け身の意識を積極的かつ主体的な参加の姿勢へと転換していくような方法が必要であると思われた。そこで、この企画では、次のような諸点を取り入れることにした。

- ①放送では一方的な講義調をとらない。  
→アナウンサーとの対話形式の採用
- ②「テキストを学ぶ」のではなく、「テキストでヒントを得る」ようにする。  
→エッセイ風テキストスタイルの編集
- ③番組での受講者との一体感を図る。  
→ハガキによるコミュニケーション方式の採用

以上の基本的な方針にもとづきつつ、講座全体の構成を次のように企画した。

- |        |   |
|--------|---|
| 10月13日 | 1. 母語を発見する喜び                            |
| 10月20日 | 2. 母語と母国語                               |
| 10月27日 | 3. ことばにならないことば                          |
| 11月03日 | 4. ことばと私①—書くこと、生きること（ゲスト・細川たかみ）         |
| 11月10日 | 5. よいことば・わるいことば                         |
| 11月17日 | 6. ことばの誤用を考える                           |
| 11月24日 | 7. 国際化と日本語                              |
| 12月01日 | 8. ことばと私②—ことばとパフォーマンス（ゲスト・川上アンドリュー・セシル） |
| 12月08日 | 9. 外国人に日本語を教える                          |
| 12月15日 | 10. 語らぬ文化と日本語                           |

12月22日 11. レトリックへの関心

01月05日 12. ことばと私③—日本語は非論理的か (ゲスト・国本昭二)

01月12日 13. ことば・文化・コミュニケーション

## 2-2-2 アナウンサーとの対話形式について

放送では、担当者が一方的に話すことを極力避け、ほとんどアナウンサーとの対話形式で行った。録音の手順としては、一応、私が作成した A 4 版 1 枚程度のシナリオをディレクターが調整し、これに基づいた打ち合わせを放送の 2 週間前に毎回アナウンサーを交えて実施した。この要領ではほぼ毎週順送りに 1 回 45 分ずつの録音を行った。とくに気をつけたことは、アナウンサーにも自分の意見を出すように担当者から要望し、二人のやりとりの中から受講者にもテーマの面白さに気づいてもらえるような番組をめざしたことである。

たとえば、第 1 回の放送の様様を活字化したものは、次の通りである。

細川 こんばんは、細川です。

足立 こんばんは、足立久美子です。いよいよラジオの公開講座が始まりました。テーマは「私の日本語再発見」ということですが、この講座の大体の趣旨はどのようなものなのでしょうか。

細川 日本語の再発見ということがテーマになっていますが、それに「私の」ということばがついています。つまり、それぞれ聞いていらっしゃる方おひとりおひとりにとって、日本人として日本語を発見するということはどういうことかということを考えてみたいと思います。

スタイルとしては、一方的に私の方からお話をするというものではなくて、そしてお聞きの皆さんもここで知識を得ようという風に考えていらっしゃる方もいるかもしれませんが、そう考えないで、一体日本語とは何だろうということを考える、一つのきっかけを作っていただければという様に思っています。

足立 そういう趣旨のもとに十三回にわたって行われるわけなのですが、スケジュール的にはどう進められるのでしょうか。

細川 この十三回、十月十三日から一月十二日までですが、ほとんどは足立さんと私でお話をしながら色々考えていくというのが大枠となります。その中で四回目と八回目、それに十二回目のこの三回は、私と足立さん以外にもう一人、金沢在住で、いろいろな方面で活躍していらっしゃる方をお一人ずつゲストとして来ていただいて、その方を交えて三人で色々とお話をしたいと思っています。この場合はことばだけでなく、もう少し広く文化や社会あるいは芸術などへも枠を広げていきたいと思っています。

足立 私自身も話すという仕事をしておりますので、色々な面でたいへん勉強になると思っているのですが、受講生で、生徒ですのでちょっとドキドキというかたいへん緊張してしまうのですが大丈夫でしょうか。

細川 そういう風にお考えにならずに、むしろ、「私の」というのは、足立さんの私で

あり、私、細川の私でもあると思ってください。そういう感じでやって行ければと思います。〈以下、略〉

当初は、担当者及びアナウンサーの両方に戸惑いもあったが、回を重ねる毎に効果のあがってきたことが確認できた。こうした番組では、担当者間のチームワークが鍵となるが、今回の成功は MRO 北陸放送の担当ディレクター吉田直樹氏の手腕に負うところが大きい。

テキスト執筆や番組の内容についてのプランを企画・実行するに当り、局側との関係が非常に重要であることを再認識した。むしろ局側の担当者との様々な模索や議論があって初めて番組が成立するといった方が確だろう。さらに、今回の講座では、共同担当者である足立久美子アナウンサーの提案・提言がきわめて有効であったことを付記しておく。

### 2-2-3 テキストスタイルについて

面白い文章も教科書になるとつまらなくなるとよく言われる。これはなぜだろうか。テキストを学ぶという意識は、学習それ自体をきわめて目的主義的に膠着させてしまうからではないか。つまり、テキストに書かれた知識を情報として吸収することで精一杯になり、その記述された内容が自分にとってどのような意味を持つことなのかをゆっくり考えるゆとりを失ってしまうからであろう。本来はそれをヒントにして様々に自分の考えを展開できるような、そういうテキストの記述・スタイルが望ましい。それには、テキストは一般の人にもすっと読み流しできるような、読みやすいスタイルであることが必要ではないかと考えた。

したがって、テキストの性格の位置づけとしては、単独でも読めるものでありながら、同時にそれが番組内容につながるようなものであるようにという執筆と放送の二本立てをこころがけた。これは金沢大学大学教育開放センターの方々との話し合いの過程で気づいたことである。前記教養部「言語文化」の授業でもラジオテキストは部分的に引用するにとどめた。

こうした意味もあって、今回のテキストのはじめに次のような前書きを付した。

この講座を受講される皆さまへ

いま、私たちのごく身近な日常のことばの有様に目を向けてみよう。

私たちはこの世に生き受けた瞬間からことばに囲まれ、ことばを通して考え、ことばによって人間関係を結び、ことばの社会を築いている。しかし、そのことばがあまりにも身近であるために、ことばについて内省することも殆どないまま、日常を過ごしているのではなからうか。

日本語を母語とする私たちが日本語について考えていこうとすることは、自らの文化、社会、そして人間について再考することとも深いつながりがある。近年の国際化の慌ただしい動きの中で、母語＝日本語のあり方が問い直されようとしているのも、こうした日本人の自覚の問題と無関係ではないだろう。

この講座では、このような日常のことばとその生活を振り返りながら、広くことばに関心をお持ちの皆さんと一緒に、ことばをめぐって様々な発見を試みてみることを



目的とする。この場合のことばの発見が、決してことばに関する知識としてではなく、参加者一人一人の内側の問題であることを確認することができればと考えている。

このことを踏まえ、放送ではアナウンサーとの対話やゲスト講師を交えた座談会方式を取り入れ、ことばに関する問題を皆さんと一緒に考えていこうとする方法をとった。また、テキストも、多くの身近で具体的な事柄を素材としつつ、時には講師の個人的な体験をエピソードとして織り込んで、従来のラジオ講座テキストとはやや異なるスタイルのものをめざした。

なお、各回の末尾の《かんがえてみよう》では、それぞれ考えるべきテーマをいくつか挙げた。《よんでみよう》で示した比較的最近の入手しやすい参考文献を手がかりとして、任意のものを選び、これからの学習のきっかけとしていただければ幸いである。

こうしたスタイルをとる場合には、やはりテキストは一般の書店で市販されることが望ましい。ただ、そのためには部数・販売期間等の点から見てより早い時期から講座企画をすすめる必要があるだろう。そのためにはどのようなことが改善されるべきなのだろうか。今後の課題であろう。

#### 2-2-4 受講者とのコミュニケーション

番組に関する意見・質問・要望等をハガキの形で出してもらうよう受講者に対して毎回呼びかけた。これに対し、前記「言語文化」の受講生を中心に、留学生、一般主婦、大学受験生等かなり広範囲の聴取者から様々な反応が得られた(計85通)。このハガキを番組の導入や中休み等に積極的に利用し、これに答える形で番組を構成した。受講者のニーズを中心にすえながら、受講者とのコミュニケーションを図るという方法を採用した点で、従来の一方的な講義形式から部分的にはあるが脱却できたと考えている。

一方、正規の公開講座登録者からのものが見られなかったのは、従来の知識情報受動型の講座になれてしまった受講者には、こうした受講者参加方式にはやや戸惑いがあったのではないかとも思われる。今後のこうした番組自体の質の転換によって受講者の質にも変化の生じることが予想される。

次に番組へのハガキの一部の紹介しておこう。

- 前略 ラジオ講座毎回たいへん面白く聞かせていただいております。普通の講義とちがって生き生きとした感じがいたします。ところで、政治家のことばが問題になっております。「前向きに普処します」という言い方には誠意が感じられません。どう考えたらよいのでしょうか。(50才・女性)〈10月30日消印〉
- 前略 毎回興味深く細川先生の公開講座を聞かせていただいております。「母語」についてのお話を聞いているうちに、「言語」というのは、その人の属しているグループそのものを代表しているものだし、「ことば」というのは、その人自身を代表するものだと思います。「ことば」を大切にしない、「ことば」について考えないことは、自分についても無関心なのだと思います。(大学生・男性)〈11月7日消印〉
- 先生、今晚は、11/10の放送を聞いて私はショックを受けました。というのは“母

語は自分では選べない、肌や髪の色と同じようなものだ。母語を変えるには親を変えるしかない”という先生のおっしゃられたことについて今まで然々（ママ）気付いていなかったことがわかったからです。〈略〉私は母語である日本語というものを〈略〉自分の中に根づいている一つの文化として、本当に知れたらなと思いました。（大学生・女性）〈11月30日消印〉

- 私はインドネシアから来た留学生です。10月20日の「私の日本語再発見」ラジオ講座での細川先生が仰しかったような母語・国語ということインドネシアでははっきり見ることができます。インドネシアではいくつかの民族があって民族は全く違いはありません。そして国語として私たちはインドネシア語を使っています。しかし、日本ではそういうことは見えません。民族語ということはありません。あってもはっきりしません。このことについては日本の友達と話した時彼が納得できないのはやっとわかりました。同じ島国である日本では民族語はないのは不思議なことだと思います。あるいは日本は一つの民族しかないのでしょうか。（インドネシアからの留学生）〈10月26日消印〉
- はじめまして。いつも楽しくラジオをきいています。私は今大学受験生で国語がさっぱりわからなくて毎日こまっています。“国語には本当の答えはない”とよく言いますが、結局は○×で決められてしまうので、ぜんぜんおもしろくありません。受験だから仕方のないことかもしれません……○をとるための学校の授業とはうってかわって、金沢大学公開講座はとてもおもしろいです。それになんとなく国語というものがわかるような気がします。いつもは気につけない日本語というものも、ああ、そうなんだ、と考えさせられてしまいます。これからはたのしい話をたくさんしてください。ペンネーム LONELY でした…（高校生・女性）〈11月30日消印〉
- 細川先生、安達さん、こんばんは。毎週楽しく聞かせてもらっています。私が小学生だった時、妹から「おねえちゃん、ごはんがおいしいことと野球をするのが上手なことは、全然ちがうことなのに、どうしてもどっちも『うまい』って言うの」と質問されたことがあります。わたしは答えに迷って、すぐそばにいたおばあちゃんに「答えて」と頼んですぐ逃げてしまいました。今、同じように質問されたら逃げることなく自分で考えたいです。そういうことを自分で気付くように、普段からことばに対して敏感になりたいです。それから、実家にいるおばあちゃんにこの講義のテープを送ったら私と一緒に金大で勉強したいと意気込でいました。おばあちゃんに負けず頑張りたいです。それではさようなら。（大学生・女性）〈1月6日消印〉

### 3 放送利用公開講座との合体の試み

以上の放送利用による公開講座の企画段階で、前記「言語文化」との合体を思いついたのは、一方向的になりがちな大学の授業を少しでも活性化させ、立体的な授業構成ができないものかとひそかに悩んでいたからでもある。つまり、ラジオを聴いた学生の反応を見ながら、こちらもラジオの録音の際に、それらを取り入れ、さらにその結果を学生とともに話し合いながら双方向的な方法で大学の授業を展開することができたら興味深いのでは

ないかと考えたわけである。

報道関係の協力も得て、次のような自己宣伝文も用意した。

このたび金沢大学大学教育開放センター放送利用講座（ラジオ）を担当することになりました。

テーマは、88年度学内講座で定員を上回る御好評をいただいた「私の日本語再発見」、第1回放送は、10月13日（土）夜9：00からです。

今回の13回にわたる講座では、MRO 北陸放送の人気アナウンサー足立久美子さんと一緒に、従来の大学講座とは一味違った、新しいスタイルのラジオ講座をめざします。

また、この社会人向けのラジオ講座と、大学内の一般教育科目とを内容的に連動させた立体構成の講義「言語文化」（月・8：15-10：30）も10月15日（月）よりほぼ同時進行形態でスタートします。

大学のレジャーランド化が嘆かれる現在、向学心に燃えた社会人の方々そして未来への可能性を秘めた大学生たちとともに、私たちの母語・日本語について改めて考えつつ自らの言語生活を振り返ってみようと思います。

宜しくご支援くださいますようお願い申し上げます。（1990/10/01）

1990年度後期の金沢大学教養部の学生を対象とした講義「言語文化」（臨時総合科目/月・8：50-10：30）の講義テーマをラジオと同一テーマ（「私の日本語再発見」）とし、放送とほぼ同時進行の形態で行った。講義出席にはラジオを聴いて来ることを前提とし、その感想を提出させたり、あるいはテーマについてディスカッションをさせたりして講義をすすめ、放送の内容の発展・展開をこころがけた。さらに、講義中にことばに関する様々なアンケートを実施し、この結果をラジオ番組に盛り込むことを試みた。

この講義には教養部在籍の日本人学生70名、留学生2名が登録した。また、この他に、非公式であるが、学外者8名が参加した。その内訳は、大学・短大非常勤講師2名、高校非常勤講師1名、中学教員1名、日本語教師1名、主婦2名、自由業1名の計8名である。

#### 4 合体に対する評価と問題点—受講者のアンケートから—

こうした大学の授業の中に放送利用による公開講座を取り入れ、いわば両者を合体させる方法について、受講者側のアンケートを紹介する形でその評価と問題点を検討してみることにする。

授業の中にラジオ番組を取り入れるという方法をとったため、このアンケートはもっぱら大学授業側の回答による。アンケートは授業の最終日（1991年2月2日）に自由記述形式で実施した（回答提出者45名）。

全体的な傾向としては、以下に見える回答からも明らかなように、ラジオとの連携方式について基本的に可とするものが多かった。ただ、次のような反対論も1名あった。

- 今回のような講義とラジオという二通りの方法で授業をすすめるのはめずらしく興味深かったけれど、1つのテーマを追っている風にはみうけられなかったし特にラジオは聞き忘れてたりすることもあって、何だかチグハグな感じがしたので、やは

り1つの授業は講義かラジオの一つにしぼって進めていく方がいいよと思う。(教育学部1年、K・N)

回答形式が自由記述のため、他の問題と関連づけて述べられているものがほとんどだが、関係のある記述を次に挙げる。

- 私は、大学の授業というのは、大学生しか受けられないのかなと思っていました。でも、“言語文化”の授業は私達大学生から近所のお年よりまで、様々な人が授業を受けているので、すべての人に勉強する権利が与えられているんだということがとてもよくわかりうれしかったです。また、ラジオと授業をWで使っているのも他の講義とは一味ちがってとても新鮮でした。それに私たちからも、はがきやレポートを出す形式だったので、一方的に何かを教えられるだけじゃなくて、いろいろ考えることができたし、自分の考えを先生にも知ってもらえたと思います。とてもコミュニケーションのある授業だったなあとと思います。一方的に何かを教えられるだけの授業より、こんな風に、問題についてみんなで考えたり、意見を出し合ったりする授業の方が私は本当に何かをつかめるような気がしました。(教育学部1年、M・K)
- 討論形式を取り入れたり、学生のアンケートを基礎に授業を組み立てる、また、ラジオとも連動してと、大変楽しい講義だったと思う。残念だったのは、討論らしいものにならなかったこと、もう少し時間があれば討論になったのではないかなと思う。学外者にも開かれた、このような授業が来年度からなくなるのは本当に悲しい。〈略〉教育現場は、雑務に追われることもあって、なかなか研究を続けることはむずかしい。大学の先生と教育現場とがつながって現場のレベルアップを図る方法がかなりの地域で行われており、一番望ましい形と思われる。(中学教員、Y・N)
- この授業を聞いている人々は、日本語もう母国語として、二十年以上も使って、しかも教養のある人ばかりです。先生は授業中始めから終わりまで、自分一人で話すだけでなく、一つの問題をもちあげたら、先生は必ず皆の意見を聞き、それで自分の考えを述べます。そうしたら、皆はある問題に対して、全般的に把握しやすくなります。この授業は積極的な授業です。またラジオ講座を聞かせたり意見を書かせたりするのもいい勉強になっています。(留学生〈中国〉、S・R)
- 今回のような講義は、高校までは全く経験しなかったような、学生と市民が一体となって参加するものであったので、驚くと同時に「開放された大学」というものを実感した。ただラジオと連携していたため、なかなか時間がとれず、テープに録音するなど苦労した。この点から言えば、講義終了後、希望者にテープを貸し出すなどの措置があっても良いと思う。講義は討論を積極的に取り入れていた点でずいぶん参考になった。特に年代も異なる方々からの意見は、学習面だけでなく生活面も取り入れられていたので、役だった。どうしても普通の講義を聴くばかりが主体となって、意見の発言の場がない。意見発言の場が無くなれば、当然、あまり考えなくなり、いい加減な判断しか下せなくなる。そんな中で、ここでは発言が重視されることで、自分なりに考えて発言する習慣ができた。これから自分の意見を積極的に発言できる講義が増えてほしいと思う。また受講時に人員を制限し、少人

数の中で、このように討論していく方法なら、学生の学習意欲も、さらに増すのではなかろうか。(法学部1年、S・Y)

- 今回の授業のスタイルについてですが、学外の方が参加されたり、ラジオ放送では葉書の紹介等があったりとスケールの大きな講義であったと思います。最初のうちとはまどいますが、慣れてくると刺激のある講義に思えます。また講義中にも討論があったりなどして、普通のとは違った立体的な授業だと思います。言語文化という講義上、必然的にこのよな授業形体になったと思えなくもありませんが、新鮮さがある授業だと思います。(教育学部、J・M)
- 本来消極的な自分にとって討論形式というものはとても重くのしかかるものではあったが、もっと思考をとぎすませて発表できる人間になりたく思った。そういう個人的な性格のことは別として、こういう形式、特に社会人をも受け入れ可能な講義は、よい刺激になると思う。また、メディアを使った所も、新鮮に思われた。(但し、病気やラジオの故障で聞けなかったことが多かったのは残念に思う)MROの会場に2、3の熱心な学生を呼び討論してもおもしろかったと思う。(文学部1年、T・H)
- 今回のような授業のスタイル・方法についてどう思うかといえば、私は大変よかったと思っている。講義とラジオが並行して行われて(少し内容な違っていたように思うが)、ラジオでまた新たな問題を考え…という感じで、次から次へとことばに対する議論がふくらんでいき、講義でただ事実を教えられるのではなく、討論などで自分の問題として考え、発表していく。(それが正しかろうが間違っているか問題ではなく)この講義で一番よかった点は、やはり討論によって他人はある問題についてどう考えているか知ることができたこと、また自分でも実際に意見をのべようとして考えることによって、自分の曖昧なのはどのような点を知ることができたということ、また学生ばかりでなく社会人の人々も交わることによって、学生という同一の視点からではなく、いろいろな視点から物事を考えることを教えられた…ということだろう。また一応答えらしきものは与えられたものの、今後も日本語を見直すという課題は私達に残されていると思うし、言葉に対する不審がとりのぞかれ、言葉について関心を持てるようになったのも大きな収穫ではなかったかと思う。(文学部1年、M・H)
- 討論の時は、気のすまない時が多かったが、今までの講義にないラジオと結びついたものなのでおもしろかった。討論会の日がもう少し少なければよかった。(教育学部1年、T・K)
- ラジオと並行の講義は一面的になりやすい講義を多面的に受けられ良かったです。何回か提出したレポートの主題が書きにくいというか、中途半端にしか考慮出来ないものでした。もちろん私自身の力量のなさですが…。もっと取りつき易い考慮し易い主題が望ましかったです。(教育学部1年、M・O)
- 今回のような授業のスタイル・方法について、変わっていておもしろかったと思うが、土曜日の九時からラジオ講座は、土曜日の夜は予定が入りやすくきけない

ことが多かったし、とても困った。(教育1年、Y・Y)

- ラジオと並行しているのが画期的だと思ったが、土曜夜9時は何かと忙しく、充分に聞けなかったのが残念だ。また、バズセッションや討論などで他人の考えを知ることができた。しかし、自分は活発に意見のべられなかった。それが少しくやまれるが、聞くだけの講義より、このスタイルは考える場、考えさせられる場があって良いと思う。(法学部1年、J・H)
- 今回の授業のスタイルは、“ラジオ”を使ってという、全く新しいものだったので、とても関心がありました。でも、放送が土曜日ということで、ききのがしてしまったものがあつたというのが残念でした。今までの大学の講義にはない、新鮮さやおもしろさがあつたので、とてもよかつたと思います。(法学部1年、Y・K)

以上のように、ラジオとの連携に関しては、概して好評であつた。一方、上記の中ですで見られるように、ラジオとの連携を評価しつつも、曜日や時間帯等で困難を訴える回答も少なくなかつた。従来は曜日・時間帯は、一般の、しかも比較的高年令層の受講者を対象に設定されている。これを学生向けにも利用しようとするわけであるから、たしかに回答にみられるような無理が生ずるのもある程度はやむを得ぬことかもしれない。受講者の質の転換とも関わって、今後の検討課題となろう。

また、授業中の討論に関しては、学生と社会人では評価も異なっている。担当者としても討論自体はあまり活発であつたとは考えていない。それはテーマにもよるし、そして何よりも参加者の準備の問題がある。ただ、一般的な議論から専門的な議論へと進むのが道筋であるとするならば、こうした段階の討論を繰り返すことが必要だろう。その上で、準備やデータのない議論ではより深く入っていくことがむずかしいことを知ることができよう。少なくとも、まず討論できる姿勢を作ることが大切であると私は考えている。

#### おわりに一まとめと課題一

今回の大学授業と放送利用による公開講座の連携については、総じてその立体的な構成が評価された。しかし、ここで単にその連携構成だけが評価されたとみるのは早計であろう。その連携を、単に知識の定着や確認のために利用するのであれば、学習者に二重の負担を負わせることにつながると考えられるからである。やはり基本的には、講義と放送とが2本立てで進められ、相互に補完的な役割を果していくということが適切ではなからうか。

このことは、公開講座とスクーリングとの関係でもいえることである。一般にスクーリングは、講師対受講者という図式で捉えられがちであるが、アンケート回答にも見られるように、「他の人の考えていることがわかる」ことが学習者にとっては大きな鍵になると思われる。その意味では、スクーリングは、受講者間コミュニケーションをめざすべきであるともいえよう。スクーリングを単なる形式的な行事に終わらせずに、質疑応答をより活性化させ、受講者間のコミュニケーションを図っていくためにはどうしたらよいか。大学授業への放送の導入の前に解決すべき課題であろう。

大学の授業と放送利用の公開講座との関係については、それぞれの専門の領域・分野あ

るいは担当者の考え方によって様々な形態・方法があり得るだろう。このありように制限を加える必要はないと思われるが、こうしたメディアに不慣れな講師の側にかなり戸惑いのあることは否めない。それぞれの大学が地域的な連合等によっていろいろな情報交換を重ねていくことが必要であると思う。たとえば、前年度・次年度の引き継ぎの意味もかねて報告会のようなことを地域や学内で行うのも一つの方法ではないかと思う。それは、大学教育方法の改善や公開講座の意義等について大学内外の理解を得るための有効な手段の一つとなろう。

今回の大学授業と放送の合体が受講者から評価を得られたのは、メディアを利用するしないという問題ではなく、従来から行ってきた「言語文化」の授業方針がラジオの導入を得てはじめて結実したと私は考えている。したがって、問題は、メディアの導入そのものではなく、その前提としての双方向的な教育方法の姿勢だろうと思う。たとえば、クラスの人数の問題は最大のポイントで、これが現在の大学教養課程教育のネックになっている。つまり、大学授業と放送の合体がこうした基本的な前提を無視して奨励されるようなことがあっては意味がないし、まして、本来、十全なコミュニケーションを図りつつ行われなければならない大学教育を放送利用に振り替えて済ませてしまうというようなことは、本稿の意図と正反対のものであることを最後に付記しておく。

(1991.8.9)

(注1) 臨時総合科目「言語文化」各年度の受講登録者は次の通り。

年度	期	担当者	登録学生数	備考
88	前	開講せず	—	
	後	細川+酒井恵美子	47名	文系のみ
89	前	細川	130名	文系のみ
	後	垣田邦子	8名	理系のみ
90	前	開講せず	—	
	後	細川〈公開講座と合体〉	80名	文系のみ

なお、授業の中の具体的な討論の様子については、細川『日本語を発見する』（勁草書房、1990）を参照されたい。

(注2) 公開講座の各年度の受講登録者は次の通り。

年度	期	テーマと担当者	登録者数
88	後	私の日本語再発見 細川+4名〈質疑応答形式〉	83名
89	前	日本語を科学する 細川〈ゼミナール方式〉	11名
90	後	ラジオ・私の日本語再発見 細川+3名〈言語文化と合体〉	65名

なお、88年度後期の公開講座の記録は「季刊 言語文化2」（金沢大学教養部日本語・日本事情研究室気付・言語文化研究会編）にすべて載録した。

<付記> 本稿執筆にあたり金沢大学大学教育開放センターの佐伯信男教授には適切なお助言と暖かい励ましをいただいた。記して謝意を表したい。

(放送利用の大学公開講座主任講師：早稲田大学日本語研究教育センター助教授)